2，3 歳児から始める
―バーボールド夫人とトリマー夫人の読み書き教育

Mrs Barbauld's and Mrs Trimmer's Reading and Spelling Books for Children from Two to Four Years Old

成城大学文芸学部教授
鶴見良次 TSURUMI Ryoji

「バーボールド夫人」と「トリマー夫人」

18 世紀末のごく幼い子供の読み書き教育に大きな功績を残したのが「夫人」（Mrs）という敬称を持つ同世代の 2 人の著者である。配偶者の姓に「夫人」を付けた著者名は 18，19 世紀のイギリスの出版物においてはごく一般的なものであった。ただしこの 2 人にはいくつかの共通点があった。同世代であること，中流階級の夫人であること，教訓主義的な作風の児童文学作家であること，学校経営の経験を持つこと，そして，母親として，教師として，子供にごく幼いうちから読み書きを教えることに情熱を燃やしたことである。

読み書き教科書の著者として幼い子供とその親に親しまれた 2 人の「夫人」の 1 人はバーボールド夫人，すなわちアナ・リティーシャ・バーボールド（1743 ― 1825）である。レスター州の牧師でランカシャー・ウォリントンアカデミー（アカデミーは非国教徒のための大学に相当する）の古典語教師ジョン・エイキン神学博士の娘である。ジョンソン博士として知られる大評論家サミュエル・ジョンソンの文体を模倣して 30 代で書いたエッセイ「ロマンスについて」（'On Romances'）が博士自身の目にとまり，その文体や思想の最高の模倣であると称賛されたという。父親の学生でフランス出身のロシュモン・バーボールド牧師と結婚し，夫妻でサフォークのポールグレイヴで男子寄宿学校を開いた。2 人に子供はなく，甥を養子にしたが，その子に読み書きを教えるために書かれたのが『子供の学習』（1778）[1] である。緒言で「子供のためのものと謳う書があまたあるなかで，2，3 歳児にもわかるものがないことに気づいた。」とその執筆の動機を述べている。『子供の学習』は幼い子供のリーディング教育に画期的な方法を開拓したものとして評価される。あわせて『子供のための散文の讃美歌』（1781）も読みものとして，また読み方の学習用として好評であった。一方創作は時代の要求に合わせ空想的な要素を抑えた教訓的な内容であり，1 世代後のチャールズ・ラムには，教訓的であまりにも退屈なものとして酷評された。子供の本における想像力の飛躍を否定する態度は，もう 1 人の「夫人」と同様である[2]。

もう 1 人の夫人，すなわちトリマー夫人，あるいはセアラ・トリマー（1741 ― 1810）は，動物愛護がテーマの『寓話』（『こまどり物語』）（1786）などで知られる教訓主義の作家で，保守派の教育評論家としても活躍した。1741 年にイングランド東部サフォーク州イプスウィッチで，風景画家で後にキュー宮殿の美術品監督も務めたジョン・ジョシュア・カービーと妻セアラ・ブルの一人娘として生まれた。カービーは高教会派のイングラ

ンド国教徒であり，娘セアラもその宗旨を守っている。カービーはトマス・ゲインズバラやジョシュア・レノルズら著名な画家と親しかった。家族がロンドンに移った後，セアラはレノルズの家で，ジョンソン博士との面識を得た。大人たちの間でジョン・ミルトンの『失楽園』の一節に関して議論となった際に，折よく14歳のセアラがポケットから勉強中の同書を取り出したことに博士が大いに感心したという逸話が伝えられる。若いころからジョンソン博士と縁を持ったことも2人に共通である。1762年に裕福な煉瓦・タイル製造業者ジェイムズ・トリマーと結婚した後，6男6女をもうけ，家事と子供たちの教育に専心した。娘にはもっぱら自ら教えた。息子の教育にも熱心であったが，古典語は寄宿学校で，あるいは近所の牧師から習わせた[3)]。

トリマーが執筆活動を始めたのはいまだ子育ての続く1770年代末のことである。バーボールドの『子供の学習』が刊行されて評判になると，トリマーの児童教育への情熱や文才を知る友人らから，同じ様な本を書き出版すべきと強く勧められた。それを受けてトリマーはさっそく『やさしい自然入門』を執筆した[4)]。これら2人の夫人が著した幼児用読み方読本によって，英語を教える「教師としての母親」の言説がイギリスの子供の読書の世界に登場したと言える[5)]。

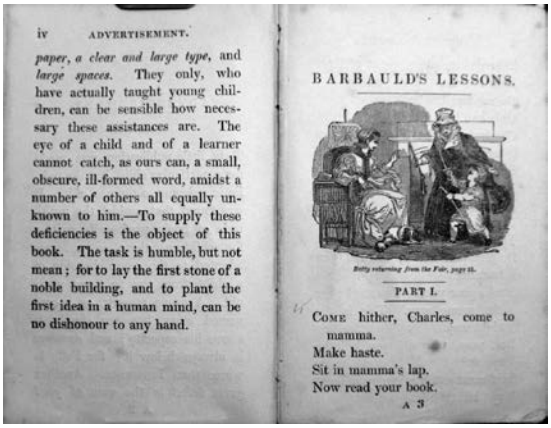
アナ・リティーシャ・バーボールド『子供の学習』

トリマーが子供のための読み書き教科書の執筆に取りかかるきっかけとなったとされるバーボールド夫人の『子供の学習』について見てみよう。

1778年にまず2，3歳児向けと3歳児向けの第1部と2部が，その翌年に3，4歳児向けの第3部と4部がジョゼフ・ジョンソンを版元に出されたようである。ジョンソンはセント・ポールズ・チャーチヤードに店を構える大手の出版者である[6)]。それ以後は多く合冊のかたちで出版された[7)]。ロングマン社などが1830年頃に出したW・ハーヴィーの繊細な口絵付きの「新版」は32折り判（14 × 9cm）のトラクト・サイズである。（トラクトはおもに布教のために用いられた宗教的な内容の庶民向けの小冊子である。）全176ページに4部すべてが収められている。本稿の引用はこの版による[8)]。（図1）

『子供の学習』はその作りと内容において画期的なものであった。児童文学史家ジョイス・アイリーン・ウェイリーが言うように，「それまで他の著者にはほとんど見られなかった幼い子供の能力への理解を示した」ものであった[9)]。当初の版でまず注意を引くのは，12枚折り判のおよそ19 × 13cmという大きな判型のページに，大きな活字を用い，行間をたっぷり取った版の組み方である。それは幼い子供にとっての読みやすさを意識したものであり，それまでの多くの小型のリーディング教科書などには見られなかったものである。緒言で「良質な紙，大きく鮮明な文字，ゆったりした配置」の必要を述べている。一方でその贅沢なページ構成は，同書が中流以上の階級の子弟を対象としたものであったことを示している。

内容上の第1の特徴は，細かく年齢別に編集されていることである。2歳児向けの第1部は‘COME hither, Charles, come to mamma. / Make haste. / Sit in mamma’s lap. / Now read your book.’（p. 1）（チャールズ，ママのところへいらっしゃい。／急いで。／ママのお膝に座って。／さあ，ご本を読みましょう。）で始まる。


iv ADVERTISEMENT.

paper, a clear and large type, and *large spaces*. They only, who have actually taught young children, can be sensible how necessary these assistances are. The eye of a child and of a learner cannot catch, as ours can, a small, obscure, ill-formed word, amidst a number of others all equally unknown to him.—To supply these deficiencies is the object of this book. The task is humble, but not mean; for to lay the first stone of a noble building, and to plant the first idea in a human mind, can be no dishonour to any hand.

BARBAULD'S LESSONS.

Betty returning from the Fair, page 15.

PART I.

COME hither, Charles, come to mamma.
Make haste.
Sit in mamma's lap.
Now read your book.

A 3

図1　アナ・リティーシャ・バーボールド『子供の学習』新版（1841）iv-1頁

母親の一方的な語りかけと問いかけの文体である。とはいえ，母親の問いかけからは当然，読者の答えが引き出されるであろう。読者のリーディング力の向上につれて徐々に音節の多い単語が用いられるようになり，文も単分から複文や重文など多様になり，内容もそれとともに難しくなる。文法の説明は最初の段階で「文字が音節を作る。音節が語を作る。語が文を作る」（4 頁）ことが教えられるのみである。意図的に並べられた多くの例文を通して各品詞とその役割，イディオムやコロケーション，一致などの文法が自ずと段階を追って学べるよう工夫されているのである。 第 2 部 で，‘Shoemakers make shoes. / Old people wear spectacles. / Good boys love to read.（p. 53）という例文の列挙で単語の複数形と主語と動詞の一致が学ばれるというようにである。

とはいえ，児童文学作家の書いた教科書である同書は，単にリーディングのスキルだけを学ぶためのものではない。ミッツィ・マイヤーズが指摘するように, 幼い子供が文中の比喩表現を理解し, 言葉から物事を類推する力を養うことをも目的としている[10]。おもに博物誌的な知識を与えるとともに，例えば隠喩，直喩，換喩，擬人法などの比喩によって, 詩的な表現にも親しませるのである。たとえば，4 歳児向けの第 4 部の末尾には，「月は言います。私の名前は月です。」で始まり，月が 1 人称で自らの天体としての性質や子供たちの暮らしへの影響などを語ってゆく美しい節がある。「私は銀のようにとても白く美しい。私の明るさはあなたの目を眩ませるほどではないので，あなたはいつでも私を見つめることができます。私はあなたの肌を焦がすこともありません。私は穏やかで優しいのです。」（175 頁）「星はみな，その言葉で，空しくも，賢くあれと人に語りかけるのではないか」と歌うバーボールドの詩「夏の夜の瞑想」（‘A Summer Evening’ s Meditation’）と共通の詩想も指摘される美しい一節である。月は天体であるとともに，「穏やかで優しい」人格を示す。擬人法は天体としての月の（自己）紹介を超えて, 太陽が男性, 月が女性というジェンダーの二分法によってその社会性を表象し，同時に読者の月への共感や愛惜を誘う情緒的な効果をもたらしている[11]。

セアラ・トリマー『やさしい自然入門』

トリマーがバーボールドの『子供の学習』に感銘を受けて執筆した『やさしい自然入門』は，1780 年末に自費出版され，パル・マルのジェイムズ・ドドズリー，ニュー・ボンド・ストリートのジェイムズ・ロブソン，パタノスター・ロウのトマス・ロングマンらの店で販売された。12 月 14・16 日付け『ジェネラル・イヴニング・ポスト』紙に「次週月曜日刊行」の広告が出された。翌年 1 月には『月刊レヴュー』誌の書評欄に取り上げられ，「知的な楽しみと有益な教えとが結びついた」良書としてすべての親たちに歓迎されるであろうとの称賛を得た。事実同書は好評をもって受け入れられ，世紀末までに 10 版，1813 年までに 14 版が出された。ブリティッシュ・ライブラリーにはそれ以後のものとして 19 年と 20 年頃の版が見られる。

同書は，序言に述べられているように，神学者で讃美歌作家のアイザック・ウォッツ（1674-1748）の教育論に発想を得たものである。ウォッツの『少年教育論』第 2 節の，ものごとを新鮮にとらえることのできる子供のうちに自然の万物に親しませ，その驚異から神の摂理を教えることが重要であるとする部分[12] が 18 行にわたって引用されている。トリマーは，その考えにそって，「子供の理解力に見合った方法で」「「摂理の仕業」について概説した本が大いに有益であると思われた」と同書執筆の動機を述べている。（v － vii 頁）トリマーがバーボールドから最も影響を受けたのも，この「子供の理解力に見合った」論述方法という発想であった。それは何よりもその文体に具体的に表れた。すなわち，母親がその子供に語りかける日常的で親しみやすい文体である。事実トリマーはバーボールドの書に触れ，次のように書いている。

ここで私がぜひとも触れなければならないの

は，バーボールド夫人の2，3，4歳児別『子供の学習』（セント・ポールズ・チャーチ・ヤード72番地〔ジョゼフ・ジョンソンの店のアドレス，引用者注〕にて販売）という大変有益な本のことである。親しみやすい会話体で書かれており，堅苦しさがなく，幼い子供たちに読み方を教えるための本としては，これまで私が見たもののなかで最適のものであると思う。私はこれまでつとめて親しみやすい表現を採用してきており，この才能ある著者が築いてきた児童教育の基礎のうえで仕事を進めてきた。（x頁）

このようにしてトリマーは子供の読書教育に取り組むようになる。その主たる動機は，自然やその背後にある摂理についての知識を子供にわかりやすく伝えるというバーボールドの試みへの共感であった。しかし『やさしい自然入門』はより年齢の高い，すでにリテラシーを身につけた読者を対象とした読本である。それより易しい内容のバーボールドの書でも，読み聞かせるのではなく幼児が自分で読むにはやや難しい。そこで，まだABCを知らない幼い子供がアルファベットや綴字を理解するための教科書としてトリマーが著した入門書が『幼い子供のための小さなスペリング・ブック』（1782あるいは1783）とその続編『幼い子供のためのやさしい学習』（1786）（以下，それぞれ『小さなスペリング・ブック』『やさしい学習』と略記）[13]である。

トリマー『小さなスペリング・ブック』とその続編『やさしい学習』

『小さなスペリング・ブック』（図2）の初版は残存しない。序言に，バーボールドの『子供の学習』を読むのに必要な綴字知識の初歩を学ぶためのものであると明記されていることから，1778年に『子供の学習』が出てさほど時を経ずして，すなわち80年代初頭には執筆されたと考えるのが妥当であろう。P・M・ヒースは82年あるいは83年としている。現存する最も古い版はバーボールドの『子供の学習』と同じジョゼフ・ジョンソン刊の86年の第2版である。32枚折り判で，およそ13×9cmのタイトル通りの小型本である。本節では，トリマーが最初に著したスペリング・ブックであり，後の『慈善学校スペリング・ブック』と異なり就学以前の学習者を対象としたものとして，その内容を見てゆく。

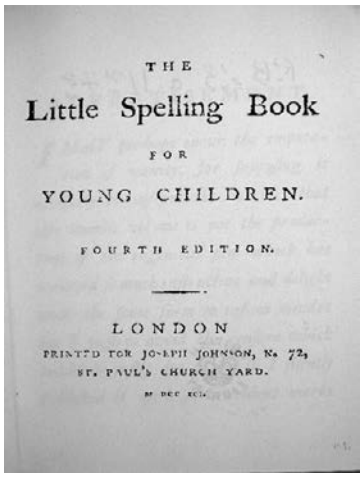

THE
Little Spelling Book
FOR
YOUNG CHILDREN.
FOURTH EDITION.
LONDON
PRINTED FOR JOSEPH JOHNSON, No. 72,
ST. PAUL'S CHURCH YARD.
M DCC XCI.

図2　セアラ・トリマー『小さなスペリング・ブック』第4版（1791）扉

著者は緒言で，まず，バーボールドの『子供の学習』のようなやさしい言葉を用いた本を読むためにも，幼い子供に「アルファベットから語の分節へと」順を追って教える綴字の入門書が必要であると説く。そのうえで，それまでのスペリング・ブックの指導法は「生徒や教師にとってひどく退屈でうんざりする」ものであるとし，学習に娯楽性を持たせる必要をも示唆している。たとえばボール紙に活字体で文字を書き，ばらばらに切って，それを組み合わせて単語にするというゲームである。（iv－vi頁）

同書は3部構成である。第1部，2部のリーディングについての解説部分はイタリック体で示されている。それらにおいても，また第1部の後半から示される練習用の文章においても，バーボールドに倣った，母親が息子のチャールズに語りかける形式がとられている。第1部は「チャールズ，あなたはもう言葉を話すことができるようになりましたから，そろそろ読み方の勉強をしましょう。」（14頁）という言葉から始まる。同書は本格的なスペリング・ブックであるが，それまでのものにはない，物語的な一貫性のある母親による談話形式をとっていることが特徴である。

第1部では，まず，文字と単語の関係，アルファ

ベットの順，大文字と小文字，イタリック体，ゴシック体文字を学ぶ。続けて母音と子音の違いが述べられたあと，母音，子音と語の関係が説明される。「どんなに短い語にもかならず母音が含まれています。母音なしで語を綴ることができないのは，糸なしで凧を飛ばすことができないのと同じです。」（22 － 23 頁）

そのあとの 30 ページほどで学ばれるのは以下である。1. ab, ac, ad など母音 1 ＋子音 1 の音節，2. ba, ca, da などの子音 1 ＋母音 1 の音節，3. 半母音字 y，4. am, an などの 2 文字 1 音節語, 5. bla, cha など 3 文字 1 音節，6. pha = fa などの同音異字音節，7. 印刷で用いられる æ, fl などの二重文字（double letters）を含む音節，8. boy, cat など子音字＋母音字＋子音字の語，9. back, buff など子音字＋母音字＋ 2 子音字の語，10. babe, bide など子音字＋母音字＋子音字＋母音字の語，11. Oil, laid, four などの 2 母音字＋子音字，あるいは 2 母音字が 2 子音字にはさまれて長母音化した語。これらについて，いずれも一覧表が示され解説される。

56 ページからはこれまで学んだ単音節語を用いた句と文が学ばれる。例句は a nice cake や a fat pig，例文は the cat mews や the mouse runs などのような，子供に親しみのあることがらを述べたものである。

64 ページからは単音節語を用いたやや長めの文で構成されたパラグラフが示される。‘Are you not glad, my dear Charles, to help a poor boy who is in want? we will give him some meat and drink too. For we should feed the poor.’（p. 66）（チャールズ，困っている貧しい子を助けたいでしょう。そういう子に食べるものや飲むものも与えましょう。貧しい人たちを養わなければなりません。）こうした文を読むには，読者にそれ以前のページの単音節語や簡単な句の学習からの飛躍が求められる。この飛躍は文字と綴りと音との関係についての理解が得られれば可能となるものである。したがって，十分な言葉の習得ができていて，音声言語においてはさまざまな構文，イディオム，コロケーションなどを理解できる学習者が読者として想定されているのである。30 ページ余りにわたって，さまざまなトピックの 3 行から十数行までのパラグラフが示される。トピックの多くは，太鼓は家の中で叩かない，木登りはしかるべき服装ですべし（91 － 93 頁），などといったものから，上に引用した貧しい人々への施しの勧めや，動物への虐待を戒めるものまで，後にトリマーが『たとえ話』などの読み物で読者に訴える中流階級の子弟に向けた道徳や生活態度に関するものである。スキルとしての綴字の学習とコンテンツとしての市民道徳とが組み合わされている。例文や練習用の文章が聖書やその要約などから取られていたそれまでの多くのスペリング・ブックとの目立った違いと言える。

第 2 部では単音節，複音節，分節を学ぶ。分節の理解の補助に音節間にはハイフンが入れられる。本文のパラグラフの文は，たとえば ‘Ma-ry is gone to Mar-ket; she will buy two Chick-ens for Din-ner, and a Rab-bit for Sup-per.’（p. 102）（メアリーは市場へ行きました。昼食用に鶏を 2 羽，夕食用に兎を買います。）のように，複音節語を大文字で始め，ハイフンを加えて示している。こうした形式の文で書かれた 10 行前後のパラグラフが第 2 部末尾まで続く。内容の多くは，よく学びよく遊べ，兄弟姉妹は仲よくせよ，清潔な身なりをしていれば友達に好かれるなどの教えである。一方著者は緒言で第 2 部の分節の学習について，鉛筆を使って練習をさせるのもよい，ある程度流暢に読めるようになったら綴字表を用いて学ぶが，表の語順に丸暗記するだけではなく，ある年齢になったら辞書で綴りの誤りがないかを確認しながら書いて覚えることが最も有効である，などの具体的な学習法を提案している。（ix － x 頁）

巻末 32 ページ分の第 3 部は，ハイフンで分節されたさまざまな単語が，鳥類，哺乳類，昆虫，樹木，花，野菜，食事，衣服，建築，名前，分詞・動名詞，職業，複合語，日時，季節，動作などに関する語，形容詞（級変化を含む），親族関係に関する語などに大まかに分類された語彙集である。1 ページにつき 20 の単語が 10 ずつ縦 2 列に

配置されている。

『やさしい学習』は緒言に述べられているように『小さなスペリング・ブック』の続編である。前著では練習用のテキストが十分ではなく，続編はそれを補うものであるという。1786 年に前著と同じジョゼフ・ジョンソンによって出版された。前著よりやや大きい 15 × 10cm の 18 枚折り判である。全 132 ページで，緒言 3 ページと本編全 3 部からなる。第 1 部に 15 課，第 2 部に 10 課，第 3 部に 3 課がある。第 2 部と 3 部の課は変則的に通し番号となっている。各課のテキストでは読者とほぼ同じ年頃の 1 人の子供の行動や性格が紹介される。第 1 部の各課は単音節語のみで書かれた 3，4 ページの文章からなる。第 2 部からは複音節語も使われる。各課は 5 ページ前後とやや長めで，語彙や表現もより多様になっている。たとえば，第 2 部第 1 課の冒頭は次のような前置詞付きの関係代名詞を倒置して用いた so that 構文になっている。‘THERE was a lit-tle lady who had a cat, of which she was so fond, that she be-stow-ed al-most all her thoughts up-on it, and spent the great-est part of her time in tend-ing and feed-ing it.’（pp. 62-63）（猫を飼っている女の子がいました。彼女はその猫のことが大好きだったので，ほとんど猫のことしか考えていませんでしたし，ほとんどの時間をその世話をしたり，餌をやったりすることに費やしていました。）第 3 部には，リーディング学習の嫌いな裕福な家庭の女の子が描かれる。母親に連れられて日曜学校を訪ね，貧しい生徒に複音節語の正しい読み方を教えられない自分を恥じ，熱心にリーディングの勉強をするようになるという話である。この読本が前著同様裕福な子供のためのものであることがわかるのと同時に，執筆当時に著者が深く関わっていた自らが経営する日曜学校での英語教育を垣間見ることができる。

幼児教育から慈善学校教育へ

宗教知識を身に付けながら音節と分節を学ぶスペリング・ブックは古くからある。多くは教理問答そのものをテキストとして用いて読み方書き方を学ぶもの，教理問答書を模した問答形式を応用して綴字を学ぶものである[14)]。トリマーが「ひどく退屈でうんざりする」と言ったのはその反復応答によって内容を機械的に丸暗記する学習法（rote lesson）である。トリマーの『小さなスペリング・ブック』では，バーボールドが開発した母親が幼い息子に親密な態度で語りかける文体が採用されている。知識を反復して暗記してゆくのではなく，読み聞かせて理解させるのである。練習用の文章の話題も散歩や遊びなど子供に親しみやすい日常的なものに限られている。この反復応答＋丸暗記の学習法への批判こそが，バーボールドとトリマーが自ら読み方読本やスペリング・ブックを書いた動機であると言える。そしてそれは，トリマーが 1780 年代末から本格的に取り組むようになる当時の慈善学校の教育に対する批判の動機ともなった。慈善学校における学習法とそれへのトリマーの批判については別に詳しく論じたい。

追記　本稿は 2021 年度成城大学特別研究助成（研究課題「イギリス英語教科書史研究」）に基づく研究成果の一部である。

注

1）Mrs [Anna Letitia] Barbauld, *Lessons for Children*（1778）.

2）バーボールドの経歴については，Hamphrey Carpenter and Mari Prichard, *The Oxford Companion to Children’s Literature*（Oxford, 1984）; Victor Watson, *The Cambridge Guide to Children’s Books in English*（Cambridge, 2001）のそれぞれバーボールドの項および *DNB*（*Oxford Dictionary of National Biography*）を参照。

3）トリマーの経歴や著作の書誌については *DNB* および P. M. Heath, *The Works of Mrs. Trimmer（1741-1810）*（Saarbrücken, 2010）を参照。作家，評論家としての活動については，拙論「妖精物語の残酷性」（*Otsuka Review*, 22 号，1986 年 8 月，51 － 58 頁），同「革命論争と妖精物語論争―トリマー夫人と勃興期のイギリス児童文学」（山形和美編『聖なるものと想像力』下巻，彩流社，1994），および拙著『マザー・グースとイギリス近代』（岩波書店，2005）第 3 章を見よ。

4）*Some Account of the Life and Writings of Mrs. Trimmer, with Original Letters, and Meditations and Prayers, Selected from her Journal*, 2 vols（London,

1814), I, p. 43 を参照。

5）特にバーボールドの児童書における教育者（educator）＝教養ある母親（cultural mother）の言説の問題については，Mitzi Myers, 'Of Mice and Mothers: Mrs. Barbauld's "New Walk" and Gendered Codes in Children's Literature', in *Feminine Principles and Women's Experience in American Composition and Rhetoric*, ed. by Louise Wetherbee Phelps and Janet Emig（Pittsburgh, 1995), pp. 255-88, および William McCarthy, 'Mother of All Discourses: Anna Barbauld's Lessons for Children', *The Princeton University Library Chronicle*, 60-2（1999), 196-219（同論は後に *Culturing the Child 1690-1914*, ed. by Donelle Ruwe（Lanham, Maryland, 2005), pp. 85-111 に再録）に詳しく論じられている。Kathryn J. Ready は，バーボールド夫人を John Locke や Jean-Jaques Rousseau の影響下の優れた啓蒙的母親＝教育者の例としてとらえるとともにその詩に新たな共和主義的母親観を認めている。'Looking Beyond the Enlightenment Mother-Teacher: Anna Letitia Barbauld and the Eighteenth-Century Maternal Ideal', *ABO: Interactive Journal for Women in the Arts, 1640-1830*, 11-1（2021）[accessed 6 May 2022].

6）ジョゼフ・ジョンソンについては H. R. Plomer, G. H. Bushnell, E. R. McC. Dix, *A Dictionary of the Printers and Booksellers Who Were at Work in England Scotland and Ireland from 1726 to 1775*（Oxford, 1932; repr. 1968), p. 141 を参照。

7）『子供の学習』の書誌は Ian Michael, *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870*（Cambridge, 1987), p. 397 を参照。

8）Mrs Barbauld, *Lessons for Children. In Four Parts,* new edn（London, 1841).

9）Joyce Irene Whaley, *Cobwebs to Catch Flies: Illustrated Books for the Nursery and Schoolroom 1700-1900*（Berkeley, 1975), p. 40 を参照。

10）Myers, pp. 270-71 を参照.

11）*The Poems of Anna Letitia Barbauld*, ed. by William McCarthy and Elizabeth Kraft（Athens, Georgia, 1994). p. 82. McCarthy, pp. 216-17 を参照。

12）Isaac Watts, *A Treatise on the Education of Children and Youth*, 2nd edn（London, 1769), p. 16.

13）小論の筆者が見たものは [Sarah Trimmer], *The Little Spelling Book for Young Children*, 4th edn（London, 1791），[Sarah Trimmer], *Easy Lessons for Young Children*, 2nd edn（London, 1790)。初版発行年は Heath のトリマー著作目録などによる。

14）問答形式を用いたスペリング・ブックについては拙著『イギリス近代の英語教科書』（開拓社，2021）第 6 章を見よ。

図版出典

図 1　Mrs. Barbauld, *Lessons for Children. In Four Parts*, new edn（London, 1841). 架蔵。

図 2　［Sarah Trimmer］, *The Little Spelling Book for Young Children*, 4th edn（London, 1791). British Library.